

えの教頭

〒514-0003
津市桜橋2丁目142
三重県公立小中学校教頭会
教育文化会館別館3階
TEL 059(228)2340
FAX 059(228)2271
E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp



1年を振り返って

三重県公立小中学校教頭会会長

植田 源嗣

年度末を迎え、皆様におかれましては本年度のまとめや次年度に向けての準備等お忙しい日々をお過ごしのことと思います。昨年度、県教頭会は発足50周年という節目の年を迎えるました。本年度は新たな一步を踏み出す、その様な年であったと思います。私を含め8名の役員が、この1年間を乗りきることができましたのも、会員の皆様をはじめ、多くの方たちのご理解とご支援のおかげです。心から感謝申し上げます。

11月24日（土）に津市で開催しました県教頭会研究大会は、三連休の中日での開催となってしまい、準備や出席につきましてご迷惑をおかけしましたことに、まずもってお詫び申し上げます。そのような会ではありましたが、皆様のご協力のおかげもあり、実践を持ち寄った交流、活発な話し合いが行われ、それをさらに助言者の方々が深いものとしてくださいました。この機会が、私たちの教頭としての力量を高める大切な機会であること、県内の教頭がつながりあう場であり、仲間から力をもらえる場であることを改めて感じました。開催にあたりまして、ご尽力いただきました津市教頭会の皆様をはじめ、お力添えをいただきました皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

また、今年度より中央研修大会への参加にあ

たり、三重県教育委員会からの補助が実現し、多くの方が研修に参加していただけるようになりました。これは、私たち教頭会が、毎年積み重ねてきました「教頭に関する調査」、会員の皆様からの声をまとめた県教育委員会要請懇談会等があってのことだと思います。各支部で時間を作っていただきましたこと、取りまとめいただきました理事の皆様、ありがとうございました。

さて、来年度は第11期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」のまとめの年であります。今期研究で得た成果と課題を明らかにしながら、新たな夢を描く想像力と新たな夢を実現する創造力を育むとともに、私たち教頭が自信と誇りを持って働く学校づくりを進めていきましょう。

今年度で、教頭会事務局に長年（35年）勤務いただきました黒田敦子さんが退局されます。事務局に行くたびに笑顔で迎えていただきましたこと、様々な面で教頭会を支えていただきましたことにこの場を借りて感謝申し上げます。

最後に、1年間の感謝とともに、会員の皆様のご健康とご活躍を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

第46回 東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会 (富山大会)

第1分科会

富山大会で深めた見識～「教育課程に関する課題」に参加して～

四日市市立内部小学校 矢田圭毅

1つ目の提言は、愛知県東浦町立緒川小学校の「外部教育力を生かした学校づくりへの教頭の関わり～年間活動計画の活用を通して～」でした。

東浦町内にある10小中学校では、外部教育力を積極的に取り入れ、それらを年間活動計画に明確に位置付ける取り組みを行っていました。そうすることで、活動のねらいも含め、見通しをもって外部教育力の活用を行ったり、学年の担当教師が変わってもスムーズに実践を継続したりすることができると成果を挙げていました。外部人材の中で、町のスクールパートナーとして149名の大学生の登録があり、TTや補充学

習等で活躍していることや、長期休業中に各小学校で行う補充学習に校区の中学生もボランティアで参加していることは驚きでした。教頭としての役割は、地域との連絡・調整をしたり、外部教育力の教育効果の有効性や活用の工夫について、RPDCAの各段階で助言・支援(S)を行ったりすることでした。

グループ協議では、外部教育力の活用に関する取り組みや課題について交流しました。人材を見つけることに苦慮している地域もあれば、どんどん増え続けてきた活動をどう切っていくかが課題という地域もありました。また、外部協力者との交渉の中で、若手教職員が言葉の選択を誤ってトラブルになったり、中学生が自主的に地域に出て活動したときも学校が責任を問われたりという事案も出されました。会場の参加者から出された「活動の中でどんな力をつけたいのか、子どもを視点にして考えていくことが大事だ」「地域の中の学校なんだ」という意識を今以上に職員に植え付けていく必要がある」「連絡調整役を地域コーディネーターに委ねていく時期だ」という意見が印象に残りました。



2つ目の提言は、富山市立新庄中学校の「生きる力を育む教育実践～小学校や地域との連携における教頭の役割～」でした。

富山市中学校教頭会では、まず、信頼される学校づくりの推進として、積極的な情報発信を心がけ、ホームページへのアクセス数で学校への関心・期待の高さを図っていました。また、生徒による地域でのボランティア活動を推進し、数を増やし、質を上げ、評判を上げることで学校への信頼感を上げる取り組みを行っていました。次に、確かな学力の向上として、小中9年間を通した共通実践、外部講師を招いての小中合同研修会を行い、成果を上げていることが発表されました。

グループ協議では、小中連携と多忙化解消について話し合いました。小中連携では、小中で学びのスタイルを作り取り組んだり、お互いの授業をこまめに見合ったり、小学校教師が中学校の部活を手伝ったりという取り組みがありました。多忙化解消では、朝の始業時刻を早め、

休み時間を短くして下校時刻を早めたり、18時以降は留守番電話にしたり、夏季に学校閉校日を2週間設けたりと、自治体によってさまざまな取り組みが行われていました。助言者からは、「学校目標達成のために、自分の分掌の中で何ができるのかを考えさせ、全職員に参画意識を持たせること」「教頭はたいへんだ、国は何とかしろ」「現状維持は後退なり」等の助言をいただきました。たいへんな仕事の中にやりがいを見つけ、さまざまな発想をもち、楽しみながら教頭職を全うできるよう努めていきたいと改めて感じました。



第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

菰野町立菰野中学校 小林 朗

第2分科会「子どもの発達に関する課題」に参加した。岐阜市立則武小学校 小森健司教頭、岐阜市立方県小学校 林大隆教頭、朝日町立さみさと小学校 内山真之教頭からの提言があった。2つの提言を受けて、199名の参加者が25のグループに分かれて研究協議を行った。

小森健司教頭先生からは、「チーム学校としての児童サポート－チーム学校を支える教頭の役割－」というテーマで、提言があった。主題設定の理由は、岐阜市内では児童生徒数はゆるやかな減少傾向にあるのに、通級指導教室へ通う児童生徒数は年々増加の一途をたどっており、

この3年間で、1.4倍を越えているという現状があるということである。こうした状況を踏まえ、学習面や生活面で特別な教育的配慮を要する児童生徒への個別の支援体制の充実を図ることは、どの学校においても喫緊の課題と捉えてのことと説明があった。研究の方法は、①自校での実践、②定例教頭会における実践交流、③ケース会議等外部機関との積極的な連携ということであった。また校内の支援体制の充実、保護者との共通理解・連携、外部機関との連携について発表があった。特に教頭としての働きかけとして、配置されている支援員（ハートフルサポーター、ハートフルティーチャー等）と積極的に懇談を行い、校内の実情に合わせて意図的・計画的な配置を進めたり、情報を共有したりして、個に応じた適切な指導・支援につなげているということであった。そして支援が必要な児童が、通常学級に在籍している場合、担任一人がその対応にあたるケースの場合は、校内特別支援コーディネーターと連携を図るとともに、教頭が保護者や外部機関と積極的に関わり、調整を図ることで、就学指導にむけた校内体制整備に成果を上げていると報告があった。また「子ども・若者総合支援センターエールぎふ」という外部機関との連携が、訪問発達相談や発達検査等をスムーズに実施することにつながり、保護者との共通理解を図り児童への直接支援を具体化する成果を上げているということであった。

次に内山真之教頭先生から、「心豊かでたくましい子どもの育成を目指してー小中・地域・機関との連携を生かす教頭の役割ー」というテーマで提言があった。朝日町には、小学校が2校、

中学校が1校あり、教頭会は3人の教頭以外に、町教育センター、町教育委員会の計5名で構成されていて、「オール朝日町」として、次代を担う児童生徒が心豊かでたくましく生きる力を育もうとしているということである。子ども達の現状や課題について共通理解しながら、取組の連動性や調整を図っている。教頭会を軸として、小中・教育委員会を含む外部機関との連携がとりやすく、研究・実践が直結しているというメリットがあるということである。小中の効果的な連携として、町センターを中心に小中の教員が共同で、情報・郷土教育等の研修を企画している。また小中一斉のノーゲーム・ノーテレビデーを同時に実施し、自己マネジメント力の育成に町PTAと連携し取り組み、効果を上げている。また地域と連携した宿泊登山や町教育センターと連携した小中合同調査（教職員満足度調査）、合同研修会等を行い、教職員の資質向上や働きやすい職場環境づくりに成果を上げている。

2つの提言後にグループ討議を行った。三重県と共にした課題や解決策、またその地域ならではという特色ある取組など交流することができ大変充実した研修となった。



第3分科会

「教育環境整備に関する課題」に参加して

津市立西郊中学校 北森 敬子

第3分科会「教育環境整備に関する課題」に参加しました。

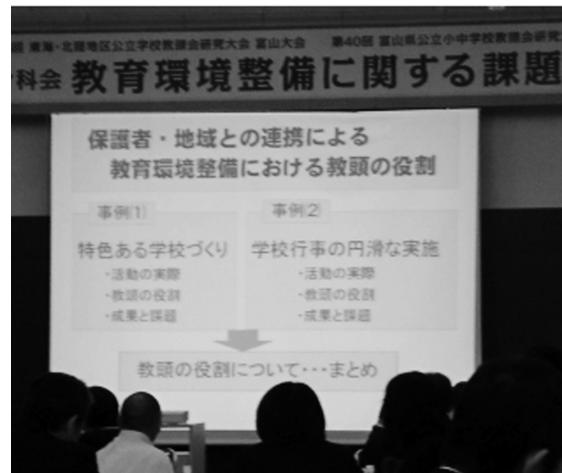
1本目の提言は、坂井市立三国南小学校杉原澄江先生、三国西小学校加藤芳恵先生から「ふるさとを愛する児童・生徒の育成のための教頭の役割」というテーマで、福井県が平成28年度より実施している「地域と進める体験推進授業」を進めるための教頭の役割についての提言がありました。

各小中学校の地域資源の情報交換と活動内容の検討、地域コーディネーターの現状把握と今後の連携方法の検討、それらを踏まえて教頭の役割の明確化を検討した実践でした。

教頭はコーディネーターとしての役割とアドバイザーとしての役割を担っていて、地域と学校の差異の調整や活動の見直しが必要となり、そのためには小中の9年間を見通した教頭同士の連携を図ることが大切であると示唆されました。

2本目の提言は富山市立大久保小学校若狭茂先生から「保護者・地域との連携による教育環境整備における教頭の役割—楽しい学校・信頼される学校・やりがいのある学校作りを目指してー」というテーマで、①学校の特色作り：栽培活動②学校行事の円滑な実践：駐車場対策の実践事例が紹介されました。

2つの実践事例の考察を通して、教育環境を



整備していく際には、教頭として以下の4つの働きかけが必要であると提言されました。①学校と地域・PTAが目標や危機感を共有する②この取組がなぜ必要なのかを提示し共感を得る③情報網のハブとしての機能を生かす④組織・チームとして成果を出すことを意識する。そして、地域資源であり財産である「ひと」「もの」「お金」「情報」等をより効果的に生かしながら、よりよい組織・チームにつくり変える（他者・団体との関係構築含む）ことこそが最も大切な教育環境整備であると示唆されました。

グループ協議では、コミュニティスクール、地域コーディネーター、学校評議員制度、小中連携について情報交換を行いました。4月に地域ボランティアと全教職員で年間計画を検討し、その後は各学年が地域ボランティアとの連携のもと、活動を進めている学校があり、大変参考になりました。

また、緊急時の対応についても情報交換しました。台風で長時間の停電を体験した学校からは、トイレが使えず、給食も実施できない状況の中では、安易に弁当持参とはできないこと、防災発電機をサーバーに繋ぐこと等、臨場感あふれる対応を紹介していただきました。

特色ある学校づくりを進めるための教育環境整備における教頭の果たす役割は非常に大きく、学校全体をデザインする役割、学校と地域のパイプ役として、間接的な立場から戦略的に関わることを意識するということを学びました。

また、危機対応や緊急時の対応については、学校発信ばかりではなく、PTAを巻き込んで保護者からの発信をすることが効果的であること、事前にできる限りの想定をして対応について保護者へ周知していくことの必要性を痛感し

ました。

助言者からは、①教科横断的視点に立って、カリキュラム・マネジメントの考え方を取り入れること②PDCAサイクルをうまく循環させること③物的・人的資源を確保することについて示唆されました。

地域資源を考えるときには物的・人的の両方を考えることが大切であり、物的資源には時間や予算が含まれ、人的資源には人材育成も含まれているという視点が大切であると学びました。

学校が取り組んでいる教育環境整備を見える化して教職員、保護者、地域住民とイメージの共有化を図り、地域を愛する子どもを育て、地域に愛される学校を作っていくないと、明日からの仕事への意欲を新たにしました。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

津市立ハッ山小学校 森 徹

2日目の分科会は、第4分科会「組織・運営に関する課題」に参加させていただきました。東海・北陸各地から200人あまりの教頭の参加がありました。分科会は、25のグループに分かれ、2本の提言をもとに活発に話し合いが行われました。

1本目は、「つながる力を育む教頭の役割－静岡型小中一貫教育を進める『つなぎ方』－」というテーマで、静岡市の中学校からの提言でした。静岡市は、平成34年度から「静岡型小中

一貫教育」をすべての学校で一斉に実施することが予定されています。それに向けて、まず、小中一貫教育構想を、①学校間をつなぐ②教員間をつなぐ③子ども同士をつなぐ④地域とつなぐ⑤学校外とつなぐという5つに分類し、教頭がそれぞれについて校区の実態に応じて具現化して実践に移していくということに取り組んでいます。その際、大切なことは、「目的をはっきりさせ(Why)」「何を(What)」「どのように(How)」「いつ(When)」実践す

るかを教職員や子どもに下ろし、子どもの意見や教職員の意見、保護者や地域の意見から創り出していくということです。

2本目は、「幼・保小中12年間を見通した教育の実現を目指す連携の在り方」というテーマで、南砺市の井口中学校からの提言でした。同市は中学校8校の内6校が1小学校から、2中学校が2小学校からの入学という特性があり、これを生かした小中連携の在り方を模索していることです。連携を推進するための組織づくりとして、「定期的に『小中企画会』を校長、教頭、教務主任が参加して行う」「『井口学校教育研究会』を立ち上げ、小中の全教員が一貫した教育を行うための部会を構成して協議を行う」「『兼務発令』による小中相互の授業の充実を進める」ことに取り組んでいるということです。

これらの提言を受けて、グループ討議では次のようなことが話し合われました。

○学校規模や「1中1小」「1中3小」「2中3小」等の組み合わせ、学校間の距離等様々な条件のもと小中一貫教育を推進するために、教頭として、いかに組織を繋いでいくのかということが大切である。

○小中一貫の目的を教職員に意識させて取り組みが進められるようにすることが必要である。トップダウンだけの推進ではなくボトムアップでの推進が図られるようにする。

○小学校の文化、中学校の文化をすりあわせ9年間を見通した取り組みが推進できるような組織を作り、合同行事だけでなく授業を通して実践を推進していくことが必要である。

○教職員同士が顔を合わせ、子どもの様子を見



合い、地域を巻きこんでいくことが必要なことである。

○推進のためには時間が必要である。そのためにも、「行事の精選」「ＩＣＴの活用」「会議のスリム化」「校務支援システムの活用」等に積極的に取り組んでいく。

最後に助言者からは、①教職員や保護者、地域とのコミュニケーションを大切にすること②組織として人材を育成すること③ＯＪＴを通して教員を「認めて」「信じて」「まかせて」「感謝する」ことで意欲を引き出すこと④自由な意見交換ができ、学び合う教職員集団をつくること⑤ＰＤＣＡサイクルを意識して「誰が」「いつ」「何を」「どうやって」するのかをはっきりさせ実践を進めること⑥教員以外の職員の役割分担を考えること⑦主任を機能させること⑧教頭は進捗状況を把握し助言・指導を行うこと等について示唆をいただきました。

今後の自身の実践に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

「教職員の専門性に関する課題」の報告

津市立上野小学校 森 直樹

学校における教職員の年齢構成が急激に変化し、中堅教職員が少数である一方、教職経験の浅い若手教職員が多くなっており、教職員の資質向上が急務の課題となっているという認識のもと、2本の提言がなされました。

まず、珠洲市小中学校教頭会からは、小中連携を進める中で、教職員の学校運営への参画意識の向上を図り、教職員の専門性を高めていくこととする取り組みについての提言でした。

特徴的な点は、①教頭自身の力量（指導力）の向上を目指した取り組みと、②学校間の連携を生かした、部会ごとの研究に力を入れているということでした。

①に関しては、教頭自身がコーチングを研修し、そこで得た学びを職員への指導・助言に生かそうとしていました。教職員との円滑なコミュニケーションを図り、見通しをもたせながら指導・助言することで、職員のやる気を起こさせ、教職員の資質・能力の向上につなげようとしていました。

②に関しては、若手育成や専門性の向上をめざして、部会や分科会等で中堅・ベテランをバランスよく配置し、個々の学校ではできないような研修を、小中連携のよさを生かして実施しようとされていました。

次に、氷見市小中学校教頭会からは、若手教職員の育成とともに、その若手を指導するミド

ルリーダーの育成を図ることが課題ととらえ、その取り組みについて提言がされました。

その内容の一部を紹介すると、「いつでも、どこでも、気軽に」行うことができる研修を目指し、研修のテーマをしぼってのミニ研修会や若手の要望に応じた自主研修会を開き、より効果的で有意義な研修会のあり方について見直しがされていました。

また、全体研修だけでなく、学年間で互いに授業を見合うように習慣づけたり、中堅の職員や退職校長など再任用の職員をリーダーとした研修会を企画したり、専門性のある職員を1時間フリーにして授業を観てまわれるようにし、アドバイスさせるなどの取り組みがされていました。

話し合いの中では、教職員の資質を向上させていくためには、まず、教職員自身が自ら向上心を持てるようにすることが大切であり、そのためには、いかに学び合い、支え合う協働体制を構築し、それに伴って教職員の学校運営への参画意識を向上させていくかが大切であることが話題になりました。

最後に、助言者からは、次のような点について話がされました。「①教職員一人ひとりの資質を生かすためには、まず教職員一人ひとりを知ることが大切である。特に、若手職員が求めていることを把握するために、積極的にコミュ

ニケーションを図り、若手職員の資質向上のために、中堅・ベテランがそれぞれ持ち味を出せるような職場づくりを行う。②一人ひとりの教職員の職務の進捗状況を把握し、努力したことについては適切に評価し認めた上で、次のステップをさらに示し、意欲をもって学び続けられるように励ます。③個々の職員が、自らの職務を主体的に実行する職場になるように、自覚と責

任を持たせるとともに、日常的に自由に意見交換できる雰囲気を大切にし、チーム学校として取り組むことが必要である。」

本分科会に参加させていただくことで、あらためて私自身の役割について振り返るとともに、新たな気づきを得られ、たいへん有意義な時間を過ごすことができたことに感謝しております。



第6分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」報告

いなべ市立十社小学校 橋 本 弥 生

<提言 I >

「学校の特性に応じた教頭職のあり方について」
～教職員のつながりを深める働き方改革への取組をめざして～

提言者：伊賀市立三訪小学校 中矢 英二先生

伊賀市では、各学校の実態や課題について交流・分析しながら、それぞれの課題への働きかけについて実践を積み、各学校の特性に応じた教職員のあり方について研究しているそうです。教職員のやりがい、学校組織のつながり、外部

(家庭・地域・関係機関等)とのつながり、教頭会のつながりについての提言を聞き、教頭は、「やりがい」や「つながり」をつくるために、児童・保護者・地域への「動き」や教職員への「働きかけ」をいかに行うかが重要な役目になることを学びました。

分散会では、各学校の特性を生かし、必要なつながりをつくるための「動き」や「働きかけ」について話し合いました。様々なつながりづくり、連携調整が教頭としての大切な役割であり、それがうまくできると教頭としてのやりがいにつながるという話し合いになりました。

地域人材の活用についての交流も行い、地域に根ざした教育活動を進めるためには「人材リスト」を作成し有効活用すること、学校は、来てもらい、地域の人たちも来てよかったですと、両方にメリットのある教育活動にすること等を話し合いました。

<提言Ⅱ>

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」～教職員の協働体制を高める取組～

提言者：高岡市立芳野中学校 藤森 裕先生

高岡市では、若手教師の人材育成、ミドルリーダーの育成とともに、学校経営に携わる人材育成が求められることから、個々の人材育成に加えて、教職員の協働体制を高める取組に焦点を当て研究を推進しているそうです。協働体制の工夫やキャリアステージに応じた研修会を実施し、教員一人ひとりの適性や持ち味を生かすことができる組織づくり、役割分担、さらに、各自が学校経営の参画者であるという意識を高め、自分に求められている役割を自覚できる工夫が

必要であるということを学びました。

分散会では、教職員が自分に求められている役割を自覚し、協働体制を高めるために、教頭としてどうかかわっていけばよいかについて話し合いました。

本校は、小規模校ゆえ一人で複数の校務分掌の役職を担うことになります。話し合った学校の規模や職員構成は様々でしたが、どの学校でも、教職員一人ひとりに、自分が主体的に動くというやる気と責任感をもってもらいたいという思いは共通でした。教職員の意見やアイデアを積極的に聞き、組織の一員としての意識を高め、同じ目標、同じ意思で取り組める協働体制をつくっていくことが、教頭の担うべき重要な役割の一つであると確認することができました。

今回、初めて研究大会に参加させていただきました。各地域の特色や現状について話を聞くことができ、その話は新鮮であり、参考になることも多かったです。教頭の職務内容や機能について改めて考えることもできました。

富山は素敵なところでした。研究大会を支えていただいた多くの方々に感謝します。



第40回

三重県公立小中学校教頭会研究大会 (津大会)

第1分科会

「複式学級導入に向けた取組と教頭の役割」に参加して改めて感じたこと

御浜町立尾呂志学園小中学校 畑 中 伸 一

今研究大会が連休中の日開催ということで、正直なところ憂鬱であった。しかし、受付で冊子を受け取り、全体会の会場に着席した後、自分が参加する分科会のページを見た途端、くもっていた気分から開放され、楽しみが膨らみこんできた。理由は、提言者の先生も助言者の指導主事も、かつて一緒に仕事をしてきた同志だからである。事前に知らなかったことなので、なおさらであった。

初めに、大紀町立錦小学校の石谷先生（県教委と地教委の違いはあったが、共に社会教育主事として一緒に仕事を進めてきた）による「複式学級導入に向けた取組と教頭の役割」の報告を受けた。全国の地方において、極端な少子化が叫ばれ続けて何年になるだろうか。特にこれといった策も提言されず、地域や学校がどんどんと過疎化・休校に追いやられている。私が勤務する御浜町立尾呂志学園小中学校も、ずっと以前より、この過疎・少子化の最先端を走ってきた経緯がある。「これでは地元地域に学校がなくなってしまうぞ！」と地域の方々が立ち上

がり、小学校と中学校を同じ学び舎とし校舎を一新した。今から15年前の平成14年度途中、御浜町立尾呂志学園小中学校の誕生である。1階が主に小学校、2階が主に中学校が利用する仕組みとなっているが、いわゆる小中併設校で職員室は1つ、その中に小中の先生がいる。校長は1人で、教頭は小中それぞれに1人ずつ、事務職員と養護教諭は1人ずつで職員会議も小中合同である。今年度、小学生10名、中学生13名という小規模校の極みで、小学校は3複（1・2年、3・4年、5・6年）と特別支援学級1の4クラスという設置である。

ここ数年来、学校を取り巻く教育界において、これまででは考えられなかった歴史的なことが急速に進んでいる。それは『学校教育と社会教育の歩み寄り』である。「地域に開かれた学校」から始まり、今では「地域とともにある学校」という言葉をよく耳にする。「学校運営協議会」や「学校と地域の協働」「地域力向上」等々、私たちが勤める学校を取り巻く環境が矢継ぎ早に変化している。地方や田舎の学校にとって、

今後、学校運営を進めていく中で避けて通れないのが『コミュニティ・スクール』の導入と継続であることは間違いない。県内でも、社会教育界はこの2年ほどで急速に歩み寄りを示している。県内各地域で、社会教育主事や社会教育委員、公民館職員、各種関係団体等が、その地域の子ども達をどのように育もうとしていくか一生懸命考えている。10年後、20年後の地元地



域の姿を想像するからである。そのような地域の姿勢に、学校はどう歩み寄り、地域と学校をつなげていくのか、正に、校長・教頭の手腕が問われるところである。尾呂志学園も発足してすぐに文科省から「コミュニティ・スクール推進事業」の研究指定を受け（平成18年度より）、その後の平成20年度からは「学校運営協議会設置校」の指定を受けている。確かに複式学級での授業の展開は担任も大変だが、小規模校であるが故の利点も多くある。ましてや小中併設校であるため、あらゆる学校行事や昼休み等で中学生が小学生を教師の代わりに教えてくれる場面が頻繁にある。かつて、いくつも離れたお兄ちゃんお姉ちゃんから受けた「優しさ」や「思いやり」の経験の伝承・継承である。この半年間、そんな心和む光景を目の当たりにして、教頭として「学校と地域をつなげる努力」を再確認させられる日となった。有意義な分科会であった。

第2分科会

求められる合理的配慮とインクルーシブ教育

伊賀市立西柘植小学校 吉岡久晴

「子どもの発達に関する課題」の本分科会（第2-①）では、その冒頭、四日市市立大池中学校・松井茂雄先生より、「通常学級に在籍しながら、特別な支援を必要としている生徒が増加している。」との主題設定の理由が説明された。こうした現状は、県下はもちろん全国的な傾向にある中で、『合理的配慮』、『インクル

シブ教育』について深く考える機会を与えていただいた。

提案では、学校側から支援が必要な生徒の状況を教育委員会へ報告していたものを、「四日市版インクルD B」として一覧表にまとめられたものが、学校にフィードバックされたことをきっかけに、全職員による、支援の必要な生徒

についての理解が深まったことが報告された。「四日市版インクルD B」には、特別支援学級入級生徒はもちろんのこと、通常学級に入級しながら特別な支援が必要な生徒においても、「障害種別」、支援が必要な「場面」、「困難さの状況」、「手立て」など9項目が簡潔に一覧表にまとめられおり、大池中学校においては、併せて、個別の「合理的配慮シート」へリンクする工夫がなされていた。

また、三重平中学校からは、「合理的配慮の必要な生徒の取り組み」と題して、ディスレクシア（＝書字、読字障害）のAさんについて、合理的配慮を保護者と合意形成していった実践が報告された。その取り組みを通して、1回で終わらせない保護者対応、学校で「できること」と「できないこと」を明確にすること、いじめ相談はとにかく丁寧に、こじれたときは第三者に相談、合理的配慮に対する全職員の理解など、多くのことを学んだとの報告があった。

そうした提案を受けたグループ討議では、特



別支援教育コーディネーターの役割と教頭の役割の縦分けから、支援員の活用、学童保育との連携、外部機関の連携・活用など様々な悩みが討議された。

助言者からの指導として、いわゆる「グレーナ子」と呼ばれてきた子どもたちに対して、必要な支援が明確になってきており、また、教頭の役割として、子どもと保護者と担任の仲立ちをしていくことの重要性を話されたことが印象に残った。

第3分科会

「地域連携 小学校と中学校、学校と地域を『つなぐ』教頭の役割」

紀北町立海野小学校 鮎田真典

第3-①分科会では、津市立桃園小学校教頭の鈴木妙子先生が「学校間の一貫性および地域との連携を大切にした学校づくりー「つなぐ」をキーワードにー」という主題で提言をしてくださいました。

桃園小学校は久居東中学校区に属していて、

津市との合併による校区の広がりや住宅地の増加に伴い、児童・生徒数が増加しているということです。そのため、現在ハード面での整備が課題となっているということでした。例えば教室の数が足りなくて、会議室等もなく、職員会議は職員室でやらざるをえない学校もあるとい

う現状等が報告されていました。そんな中で桃園小学校は小中一貫教育の事業において、中学校教員による出前授業や、学期に1～2回の家庭学習強化週間等の取組により、小学校と中学校との連携を構築しています。また地域の方による登下校の見守りや学習支援、環境づくり等の取組を行い、学校と地域がつながっています。これら小学校と中学校、学校と地域をつなぎ、児童・生徒が安心して幅広く学べる環境づくりを担っているのが、各学校の教頭の役割であるという提言でした。

その後、6つのグループに分かれて、①地域人材の活用と組織作りについて、②地域社会とのつながりと地域の教育力向上についてという柱で討議を行いました。グループ討議では、提言いただいた桃園小学校と同じような取組をされている学校や、以前から小中一貫の取組がなされているという学校、また地域行事への参加における地域の人の協力が以前からできていた、グループを組んで来校してくれたり、自治会や老人会等の組織が各小学校の秋祭りなどで関わってくれたりしているという学校の話が出されました。反面、協力してくれている地域の人の高



齢化・世代交代が課題となっているという学校の話も出されました。

そんな中、本校は極小規模校なので、地域との関わりなくしては行事等が成り立っていないのですが、その地域との関わりの窓口となっているのが教頭であり、こまめに地域に足を運んだり連絡を取り合ったりすることによって、地域とのつながりが深まり、開かれた学校として地域からの支援が得られるのだということを再確認することができました。

他グループからは、中学校区に小学校が少ない場合は小中の連携が取りやすいが、小学校の数が多い場合や学校間の距離が離れている場合は、出前授業などでの連携が取りにくいという話も出されました。

最後に助言者の津市立白塚小学校長の伊東直人先生から次のようなご助言をいただきました。「自分で動く」のではなく、「他人を動かす」ことが大切であるということ。「つながる」ではなく「(能動的に)つなぐ」ことが大切であるということ。また「つなぐ」の他に「ともに」「Win,Win (の関係)」が大切であるということ。(いい意味で)上手に「校長を使う(表に出す)」ことが人材活用と組織作りに欠かせないということなどでした。さらに、つながりと地域の教育力向上には、目標やビジョンの共有が大切であるというお話をいただきました。最後に、地域と学校は「車の両輪」のようなものである、両者の連携なしに学校は進んでいかないというお話を聞き、この車軸の役割を担っているのが教頭であり、私自身、更なる意欲と決意を胸に抱かせていただいた分科会となりました。ありがとうございました。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

桑名市立大山田南小学校 貝 梅 美嘉子

私は、第4-①分科会に参加しました。最初に、志摩市立磯部中学校の小川幸弘先生から「小中の連携による取組の推進」という主題で提言していただきました。

磯部中学校区では、幼保園から高等学校までが隣接するという地域の特色を生かし、人権同和教育の推進と子どもたちの健やかな成長めざし、組織的・協働的に取組が進められていました。特に、人権同和教育を基盤に、教育的に不利な環境のもとにある子どもの学力や進路保障の充実を図る取組は、どの地域においても重要な課題です。子どもの将来が経済的・社会的な事情に左右されないような学校づくり・地域づくりを進めていくため、日常から管理職として若手教員やミドルリーダーの役割を明確にし、関係機関とコミュニケーションを深め、活動していく大切さも再確認できました。

この提言を受けて、その後の6つのグループ討議は、次の2つの視点で行われました。

1つ目は、「異校種間の連携を生かして発展させていくための取組について」です。中学校区で共通するテーマについて交流したり、中学校の教員が小学校へ出向き、英語や体育等の授業を行ったり、高等学校とも連携し防災訓練を行ったりするなど、地域の特色を生かして進められている取組が紹介されました。

2つ目の「地域社会の継続的な連携・取組を



可能にする組織づくりや運営について」では、小中の教職員に加え、PTA組織、自治会や民生・児童委員、高校や教育集会所の教員、教職員OBなど構成員は様々であり、多様な考え方や意見を集約しながら、地域住民による学校支援活動、放課後の教育活動、地域文化活動を行う際の苦労や工夫について交流しました。

各グループからの発表のあと、津市立草生小学校の金児校長先生より、「連携の軸は『子ども』であり、地域として常に5年、10年先の子どものあるべき姿を共有し、その姿の実現に向けて連携していくこと」「そのためにも、目の前の子どもや保護者がどのような思いを持っているのか、一人ひとりが家庭訪問等を通して的確に把握すること」「この情報をもとに、管理職としてどの機関や組織につないでいくか明確にし、地域の子どもたちを育てていくこと」

「この取組が結果として勤務時間の削減につながること」など、連携する際のポイント、教頭の果たす役割について助言いただきました。

各地域の取組や助言を聞きながら、地域によって直面する課題は違いますが、社会に開かれた

教育課程の実現に向け、チーム学校として地域連携をよりよい形で継続・発展させていくためにも、改めて自分自身や自校の取組を振り返るよい機会となりました。

第5分科会

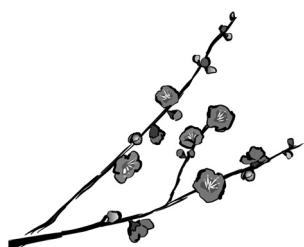
「教職員の専門性に関する課題」に参加して

松阪市立射和小学校 大辻結花

11月24日（土）に、津市立芸濃中学校で行われた第5-①分科会に参加しました。この分科会では、最初に「教職員の専門性に関する課題」に基づき、『主題 教職員の折衝力、調整力を高めるために～「ふるさと学習」推進の視点から～』と題し、名張市立梅が丘小学校の前田かおり教頭先生より提言をしていただきました。提言では、今年度より始まったふるさと学習『なばり学』の推進に向けて、教職員の地域との関係づくりや意識の向上に、教頭としてどのように関わってこられたかについてお話ししていただきました。数々の取組をされている中で印象に残ったのは、『なばり学』推進のために、様々な連携をしてみえることでした。地域の方が参加する会議等（PTAやまちづくり協議会等）で『なばり学』について説明し、協力を依頼したり、中学校区ごとの教頭会でゲストティーチャー等の交流をはじめとする情報交換をしたり、教育センターに地域行事の動画コンテンツや活動事例集を提供してもらったりと、まさに教頭先生が連携という扇の要となって進

めてみました。実際の学習では、地域の人との事務の窓口は教頭先生ですが、その後の折衝や調整は可能な限り教職員が行い、子どもたちとともに地域と出会い、話をする中で、教職員のモチベーションアップにつなげてみました。

提言を受けて、①教職員の資質・能力を伸ばし、創造性を發揮させる取組について、②教職員の専門性を高め、資質・能力の向上を図るために副校長・教頭の役割について、という2本の柱を中心にして、グループ討議を行いました。各グループでは、校種も地域もちがうメンバーで話し合いを進めたのですが、各職場で同じような課題を持っていることがよくわかりました。



特に若手教員の育成に関して教頭として考へている様々な手立てが、討議後の各グループからの発表で出されました。具体的には、「ベテランのノウハウを若手に伝えていく場の設定」、「地域教材等の取組の目標に向けての道筋を明確にし、教職員自身が主体的に取り組む」、「行事等の取組後の評価を次につなげ、誰もが担当できるような仕組み」などがグループ討議のまとめとして出され、大変勉強になりました。

その後、助言者の津市立高野尾小学校長　米野浩之先生より、たくさんのご示唆をいただきました。地域との連携については、「学校支援地域本部を中心に、どんな子どもを育てたいかみんなで話し合う場があること」、「地域の核となる人としっかりとつながり、地域の人の思いを聞き、課題解決につなげること」、「地域の人々が学校に来て活動してみたいという思いを持ってもらうこと」等、事例をもとにしてお話ししていただきました。また、「地域と連携した活動等、教職員にまかせて主体的に取り組ませる

ことが、自分で考えてやり遂げたという満足感につながる」というお話を聞き、教頭がついつい先回りして折衝や調整を行ってしまっている状況を変えていかなければならないと思いました。

多忙な日々の中ですが、様々な地域の教頭先生方とじっくり話をすることができ、お互いの悩みに共感し、そして新たな気づきも得ることのできた貴重な一日となりました。最後になりましたが、今大会開催にあたりご尽力いただきました役員・地元実行委員の皆様、本当にありがとうございました。



第6分科会

「主題：学校の特性に応じた教頭職の在り方」に参加して

伊勢市立二見浦小学校 橋 本 顯 彦

本分科会は、「副校长・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」について、伊賀市立三訪小学校中矢英二教頭の、研究主題を「学校の特性に応じた教頭職の在り方～教職員の『つながり』を深める働き方改革への取組をめざして～」と

した示唆に富む提言から始められた。中矢教頭は、自ら家庭・地域に足を運び、関係をつくり、その状況を熟知した上で、各担任等にも足を運ぶよう働きかけをしていた。状況を熟知した教頭が最適なコーディネートをすることで、担任

等は効果的に地域を知ることができるだけではなく、そこで人とのつながりが生まれたり、担任等に新たな興味が湧き、それがさらなるつながりを広げていったりする効果があった。また、学校支援本部地域事業を有効活用し、地域との連携を強化し、「学習支援」「登下校の見守り」「環境整備」等々で力を貸して下さる方と学校とをつなげる努力をされていた。以上のように、学校内外のつながりをつくる役割をされ、さらに、自らがその役割を担うだけではなく、教員にも積極的に担わせ、そのことで、さらにつながりを広げていくような努力を意図してされていた。最後に、中矢教頭は、「学校の特性を把握・認識し、教育活動への効果的な反映を推進するためには、教頭自らの『動き』と教職員の主体的な動きを支援するための『働きかけ』とのバランスが重要である。」とし、「働き方改革は、教頭の『働きかけ』改革である。」と締めくくられた。

その後は、「教職員の働き方改革」「効果的で働き甲斐のある職場の環境づくり」について、班別協議を行った。「教職員の働き方改革」では、校務分掌や仕事の割り振りを適材適所で行うことが重要だが、どのように割り振るかは、職員室の担任たる教頭の見極めが大切であり、任された仕事を教職員が遂行するときに、教頭の寄り添いが大切であるという意見が出た。また、学校は前例を踏襲することが多いが、それとらわれず思い切って変革をしていくことが重要であるとの提起もなされた。中学校の部活動については、練習時間をしっかりとりたいという思いも大切であるが、県からガイドラインが出されたことを契機に教職員の働き方改革の

視点から再考することが大切であるということも出された。

最後に、助言者である津市立東橋内中学校中川克巳校長より、「教職員の善意で支えられている学校現場であるが、現場の状況を分析し、行政がすべきことはしっかりと要求をし、予算をつけていただきることが重要である。」「これまで学校現場が経験してこなかった道徳の教科化や外国語の教科化を迎えていたが、経験してこなかったからOJTが有効に働かないということではなく、今こそ『未知のものに対する教員の課題解決能力』が重要である。」という助言をいただいたことが印象的であった。また、「管理職として『教職員に対する信頼と尊敬の念』を持ち、その活動を後押ししていくことが重要である。」「我々は『社会において子どもを育てる責任者』として、自信をもって教育活動にあたるべきである。」という言葉をいただき、それぞれの現場でしっかりとやっていこうと新たな力をいただいた気がした。

多忙な中で、同じ悩みを共有する仲間と、ともに考え、協議を行い、素敵な助言を受け、今後の活力をいただいた有意義な一日となった。



趣味・トピックス

趣味のない私の時間の過ごし方

鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校 三 浦 洋 子

「これからは趣味がないとだめだよ。今のうちに趣味を見つけておきなさい。」と定年間近の先輩の先生に言われたのは、今から10年ほど前のこと。その当時は、さして気にならなかったのですが、時間が経つにつれ、その言葉を思い出しては心がざわつくようになりました。私には趣味らしい趣味は何一つありません。中学校に勤めていた頃は部活ばかりして過ごしていればよかったのですが、それがなくなると途端に、時間を持て余すことになってしまったのです。結局は、家でだらだらとし、好きなワインを飲んでは昼寝をするという、非生産的な休日を繰り返し、夕方になると何やらむなしい気持ちにおそわれていました。

しかし、まわりを見渡すと、月に4本は映画を鑑賞している人、オーケストラで楽器を演奏している人、仲間とサッカーチームを作っている人、社交ダンスをしている人…。自分を豊かにする時間をもっている人のなんと多いことでしょう。その世界を楽しむこと、職場以外の人と広く交流することで培われるものの貴重さを改めて感じるようになりました。

そんなある時、ゴッホ展を観に行く機会がありました。絵画に詳しくはありませんが、ゴッホの絵をいいと思ったことは実はそれまで全くありませんでした。ところが、実際に絵の前に立つと、描かれた糸杉はあまりにも強烈で、確かに私を惹

きつける不思議な力があるのです。「本物の芸術に触れるってこういうことか。」と感じた瞬間でした。それ以来、その芸術家が好きでも嫌いでも、とにかく美術館に足を運ぶようになりました。じっくり見るわけではないので、ものの30分もかかるのですが、それでも静かな雰囲気が心地よく、やがては、美術館という建物自体のもつ魅力も感じるようになりました。美術館はどこも個性的で美しく、落ち着いていて、日頃の"がさがさ"や"せかせか"が消えていくのです。今では、特別な展示がなくても何となく美術館が観たくて行くようになりました。

もちろん、決して趣味といえるようなものではありません。しかし、少しずつ仕事以外の場所、自分を豊かにできるような時間を見つけていきたいと思います。そして、その中で新たな発見や気づきを重ねつつ、人間として成長していきたいものです。



都市だより

多文化共生の学校・地域づくり

四日市市立西笹川中学校 伊 藤 章

本校は、外国につながる生徒（ブラジルやペルー等から来日した日系人）が全校生徒の約3割を占め、外国人生徒の受け入れ拠点校に指定されています。国内の他県からの転入生もいますが、中には「2日前に来日した」というご家族が、突然来校されることもあります。そんな時には、保護者も生徒も日本語はほとんど話せない状態で、集金や制服、就学援助の手続き等を行うことになります。

しかし、そんな状況にも確実に対応し、さらには外国籍生徒・保護者が安心して学校生活や日常生活を送ってもらえるよう、本校には国際教育担当の教員や適応指導員が数多く配置されています。そして、様々な教育活動や多彩な教員の下で、日本人生徒にとっても外国につながる生徒とともに、多文化共生を意識しながら、毎日の学校生活・教育活動に励むことができる環境になっています。

約3割の外国につながる生徒と、約7割の日本人生徒が共に学んでいる本校の状況は、今後の日本や四日市市の国際化の在り方・進め方、多文化共生の学校づくりの方向性を考える上でのモデルとなるでしょうし、海外からの労働者が増えていくとしている昨今、本校の教育実践の果たす役割は今後もますます大きくなっていくと思われます。



中日新聞より

そんな流れの中で、この本校の現状を「強み・チャンス」と捉え、「多文化共生教育」を強く推進していくことが重要であると考え、生徒が主体となって「多文化共生サークル」を立ち上げました。

この「多文化共生サークル」では、四日市市民生活課 多文化共生推進室とタイアップし、地域の方々と密着した活動を展開しています。「笹川ふれあい祭り」「みんなの防災セミナー」等の地域の行事には教員とともにサークルの生徒が企画・運営から関わり、当日は、出店したり、ブースを設けたりして、メンバー自らが地域の人々との交流を深めながら、地域の日本人と外国人の交流を深めていくことを目指しています。

今年度は複数の新聞社とNHK津放送局の取材を受け、「多文化共生サークル」の活動や、日本人生徒と外国につながりのある生徒が普通に混ざり合って元気に教室で過ごしている本校の様子などが、県内に広く知らされることになりました。

今後も、この「多文化共生サークル」の活動の活性化を中心に、多くの困難や課題を抱えた外国につながりのある生徒の進路保障までも含めて、しっかり取り組んでいかなければ、と身の引き締まる思いをしています。



NHK津放送局より